

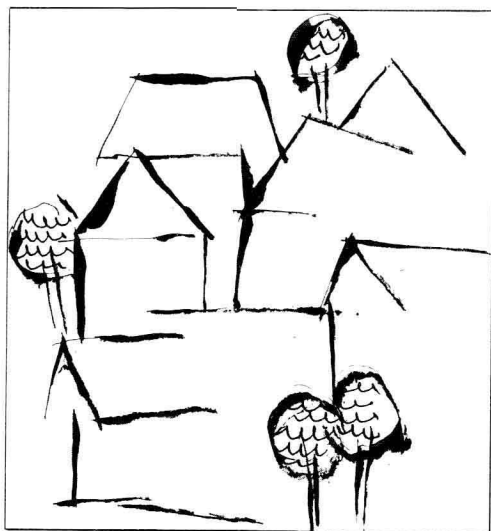


岸辺の アルバム

山田太一

岸辺の アルバム

「田太一



東京新聞出版局

著者略歴

昭和九年東京浅草に生まれる。昭和三十三年早大教育学部卒後、松竹大船撮影所演出部を経て、現在シナリオライターを主業とする。作品に「パンとあこがれ」「藍より青く」「それぞれの秋」「知らない同志」「高原へいらっしやい」「さくらの唄」「男たちの旅路」など。それらによって、芸術選奨新人賞、テレビ大賞、芸術祭大賞他を受賞。エッセイ集に「街への挨拶」がある。

岸辺のアルバム

昭和五十二年五月三十日初版発行
昭和五十三年四月十五日九版発行

著者 山田 太一

発行者 真野 義人

発行所 東京新聞出版局

東京都港区港南二ノ三ノ一三

振替口座(東京) 五―五四九七

電話 〇三四七―一二二一(代表)

〇三四七―二四四三(直通)

印刷 大日本印刷株式会社

製本 大日本製本株式会社

©1977 TAICHI YAMADA

岸辺のアルバム
目次

寒い春	空罐のこだま	律子の遍歴	反響	風の裏側	体験	冬のヨット	知らない空	昨日の夕暮	真昼のさざめき	扉をひらく	はじめの波紋
216	194	170	152	132	119	103	76	56	41	25	7

それからの岸边	汜 濫	雨の来る前	夏 沈む	五月の荒野	品川埠頭	澱 ^{よど} みの中で	葉 桜	ロボットの世界	静かな日曜日	紙の迷路
446	422	404	384	368	344	322	305	282	257	237

装幀／本文カット
深井 国

岸辺のアルバム

はじめの波紋



「カテイチョウサ？」と則子はきいた。

「そうです。家庭調査センターです」と電話の男がいった。「無差別抽出で、お電話しています」

「どんな事でしょう？」

そこまでで則子は、もう嘘を感じていた。男の声に不真面目なところはなかった。落ち着いた低い声で知的な匂いがあった。しかし、仕事であちこちにかけている声ではない。電話のベルで則子が出ると「田島さんでいらっしゃいますか？」と男はいった。その声がすでにドキリとするほどひそやかだった。思い切って男が女にかけているところがあった。

「現在の場所に、何年前からお住まいですか？」

「九年とちょっとかしら」

「お住まいの種類は——その、たとえばマンションであるとか」

「一戸建てです」

「御家族の構成は？」

「主人と子供ふたりです」

「お子さんは——つまり、お嬢さんであるとかいうことですが」

「上が女で下が男です」

「上がお嬢さん、下が坊ちゃん」

男は書きとめるように、小さくくりかえした。電話の向こうは静かだった。男のいう通りなら、他の社員がかかる電話の声があってもよかった。

「御主人は、どういう方面のお仕事でしょうか？」

「会社員です」

「会社員——」

男は、また書きとめるように黙った。「忙しいから」と切ってしまう方が自然な気がした。しかし、則子は切らなかった。

「おそいんでしょうね、つまり、お帰りがということですが——」

「ええ。商社なものですから」

「商社へおつとめですか？」

「ええ」

「へえ——」

自分より若い男を則子は感じた。

「それでですね」

「ええ——」

短く迷う気配があった。

「浮気のお相手は何人ぐらいですか？」

「え？」

「浮気の相手です。奥さんの浮気の相手です」

口早になるのを押さえているのが分かった。息づかいが聞こえた。

「秘密にしましょう。人妻の七〇パーセントは浮気をしています。私は何人だって、おどろきませんね」

則子は切らなかつた。

「いかがです？ 何人のひとと経験がありますか？ 何人の男とやりましたか？」

男の声は少しふるえた。何故切らないのだろう、と則子は自分で思った。

「数えているんですか？」

男は座躰するように短く笑つた。則子は黙っている。その沈黙に忽ち追いつめられたように、男は抗うような声になつた。

「五人か十人か知らないけど、奥さんの知っている世界など、たかが知れてると思いますね」
受話器を耳からはなした。「奥さんは何もしらないと思うな」切りぎわに、そんな声が聞こえた。

カナリアが鳴いている。細カナリアである。

十月だった。あたたかいよく晴れた日で、あけはなしたガラス戸に近く鳥籠を置いていた。

掃除を終えたところである。小さな庭にベゴニアが数株、地味な花をつけている。

庭の向こうは低いブロック塀をへだてて多摩川の堤防であった。

高い緑の土手で、居間にいると、視線の八割が土手の緑であった。その上は空である。土手の上を歩く人は、青空、曇り空、雨雲を背景にして、舞台の上の人物のように田島家階下の視野を横切って行った。

二階へあがると、多摩川が広々とひらけた。

対岸は川崎市である。登戸の家並、向ヶ丘の丘陵が見渡せる。

川音は殆んど耳に入らない。よく聞く音は、やや上流にかかる小田急の鉄橋を渡る電車の通過音であった。

どうして平気なのだろう、と則子は思った。いたずら電話である。セックスについて露骨ないい方をされた。

前にもそういうことがあった。この家ではない。前にいた下北沢のアパートで、部屋に電話をひいた数日後に「いまひとり？」と中年男の声でかかった。

「いけないなあ、自分でそんなことをしちゃ。教えてあげるよ、私が。駄目駄目脱がなくちゃ。スカートをはいたまま手を入れたら皺が寄るじゃないの」

その時は数カ月たっても、思い出すと記憶を押しやりたい気持ちになった。年のせいだろうか。あの時が二十七、いまは三十八である。

「図々しくなったのね」と呟いてみる。

でも男を怒鳴りつけるほど図々しくはなっていない。黙って聞き、黙って切った。そこのと

ころは十一年前と同じである。四十歳になるには、まだ三十九歳の一年と三十八歳の三カ月と十数日がある。まだそんなに中年というわけではない。

声だわ。むしろ声だわ、と則子は思った。

声が前とちがっていた。前の男は猥雑さが唾液のように声を濡らしているという気がした。いまの男は、そうではなかった。かまえた低い声も、自分の言葉にうろたえたように、やや高く若さを露わにしかけた時も、育ちのよさのようなものがあつた。いい声といってもいい。魅力があつたといつてもいい。

則子はひとりで小さく苦笑した。

男をほめている、と思つた。洗面所の鏡の前に来ていた。

「バカみたい」

甘えた声を出し、鏡の中の自分につくり笑いをした。横顔になる。背筋をのばしてみる。正面になる。微笑して、首をちょっと曲げて、はずかし気な表情をしてみる。ひとりである。なにをしても自由だった。

「何人の男とやりましたか？」

電話の男の声を真似て、則子は鏡の中の自分を真顔で見つめた。

日が落ちて律子が帰ってくる。

「やあね、はしゃいでるの？ お母さん」

電話のことを話すと、にべもなくそういった。

「はしゃいでるわけないでしょう」

「でも嬉しそうに話してたわ」

「すぐそういうこというんだから」

二人だけの夕食だった。

「明日吉祥寺でコンパをやるんだけど、スコッチ一本貰っていいかしら？」

「なんのコンパ？」

「何度もいったじゃない。ホンケンよ」

「ホンケン？」

「翻訳研究会よ」

「駄目。お父さん大事にしてるんだから」

「のまないじゃない」

「普段はのまないわよ」

「それがいやらしいのよね。飾っという国産のんでるなんて、ずれてるわよ。スコッチなんてどんどん安くなってるのよ。大体お酒を棚におくっていうのが分からないわ。日本酒の一升瓶ズラリと飾っておく人いるかしら？ 洋酒だと棚におくっていうの、本当にへんな趣味だと思うわ」

「居間におけば変だけど、食器棚ならおかしくないわ」

「のまないで見えるところに置いてくってという根性がいやなのよ」

私立大学の英文科一年である。成績は小学校からよかった。この半年ほどで、みるみるあか

ぬけて美しくなった。自信があり、人の話を聞こうとしない。若さの只中にいて、自分のことで頭がいっぱいで、どんな人情も必要としないという風に見えた。鼻息が荒くて、今のこの子には何をいっても無駄だという気に、よく則子はなった。

「いいわ、お父さんに直接交渉するわ」

謙作は断れないだろう。ついこの間は、福岡に転勤する部下に一本包んだ。この数年、海外出張がなくなっている。国内の繊維機械担当部長になり、前ほどブランドーもスコッチも補給がきかない。のまずに、なにやかやとなくなっていくのだった。

繁の帰宅は八時半である。八時まで塾へ行っていた。高校三年の秋だ。学校の帰りに、ハンバーガーやラーメンで軽く空腹をなだめ、帰ってからちゃんと食べるという日が週四日組み込まれていた。

「レーシング・カーってお母さん知ってるでしょ。鈴鹿とかなんとかでガーッってやるやつ。

あれのドライバーなんてのはさ、すごく貧富の差が激しいんだって。だってほら、マシンだから金がかかるでしょ。だから、本当にマシンが好きで、修理工場なんかにいてさ、段々ドライバーになったやつと、金持ちの息子なんかで、ドンとすげエの親に買わせてドライバーになった奴といるわけよね」

「もう少し綺麗に食べて頂戴」

「そういうのが一緒に走るでしょ。あいつやっちまおうかってさ、悪いのが走る前にゴチョゴチョっていうんだって。それで金持ちの息子のを、二、三台でひっかけに行くわけよね。ガーッ、ガガガッって、横からせまったりさ。こりゃ怖いよね。下手すりゃ死んじゃうんだから

さ」

「本当にお魚の食べ方、小学校の頃から変わらないんだから」

「一度ほんとに見てみたいなあ。事故おこして、キュルキュルひっくりかえって、ブワッって燃え上がってさあ」

繁には律子のように、意地の悪いところはなかった。気が好くて、帰ってくると一日のことをよくしゃべったが、これも母の話をきくところまではいかなかった。成績は中以下で、国立は勿論、私立もかなりランクを落とさなければあぶないといわれていた。しかし、人はそんなことであまり悩んでもいないように見える。食べながら、しゃべりたいことをしゃべりまくと、留守中にタイマーで録音していたF Mの音楽を確かめに二階へ駆け上がり、パタンとドアが閉まった。

あとは謙作である。

十二時までは待つことにしている。すぎると床に入った。起きていてもいいのだが、謙作が寝ている、という。待っていると思うと、歯切れのいい仕事が出来ない、という。夜中までなにが仕事かと思うが、今日はのみたくないといい、事実朝から疲れた顔で出て行きながら、夜半まで帰らない日が続くと、好きただけではないのだ、と思う。契約をとるのに、酒のみ麻雀をしなればいけないとは、やりきれないことだと思うが、どこまでどうなのか則子には分からない。仕事の話を謙作はしなかった。家に持ちこまないのが男らしいと思っているふしがある。

そのかわり家のこともごたごた耳に入れるな、というのだが、それでは夫婦で黙りっこをし